

大司空村東南地J25卜辞の分類

石川大我

キーワード 殷墟甲骨文 大司空村 非王卜辞 J25卜辞

著録等略称

- 乙編・董作賓『小屯 殷虛文字乙編』（一九四八年（上輯・商務印書館）一九四九年（中輯・商務印書館）一九五三年（下輯・中央研究院歷史語言研究所）一九九五年（新版））
- 合集・郭沫若・主編『甲骨文合集』（中華書局 一九七八年（一九八二年）附録
- 屯附・中国社会科学院考古研究所『小屯南地甲骨』（中華書局 一九八〇年）附録
- 存補・胡宏宣・王宏・胡振宇『甲骨続存補編』（天津古籍出版社 一九九六年）
- 花東・中国社会科学院考古研究所『殷墟花園莊東地甲骨』（雲南人民出版社（二〇〇三年）修訂本（二〇一七年））
- 掇二・掇三・郭若愚『殷契拾掇』（上海古籍出版社 二〇〇六年）
- 村中南・中国社会科学院考古研究所『殷墟小屯村中村南甲骨』（雲南人民出版社 二〇一二年）

R・中央研究院歷史語言研究所編号（掲載：「史語所數位典藏資料庫 整合系統」（<https://ihparchive.ihp.sinica.edu.tw/ihpkmc/ihpkmc>））

参考文献

- ① 馬得志・周永珍・張雲鵬「一九五三年安陽大司空村發掘報告」（『考古學報』第九冊 一九五五年）
- ② 中国社会科学院考古研究所安陽發掘隊「1958—1959年殷墟發掘簡報」（『考古』一九六一年・第一期）
- ③ 中国社会科学院考古研究所『殷墟發掘報告1958—1961』（文物出版社 一九八七年）
- ④ 蔡哲茂「説文」（初出：『第四届中国文字学全国學術研討會論文集』（大安出版社 一九九三年）（再録：『甲骨文獻集成』第一四冊（四川大学出版社 二〇〇一年））
- ⑤ 楊郁彦『甲骨文合集分組分類總表』（芸文印書館 二〇〇五年）
- ⑥ 蔣玉斌「殷墟子卜辞的整理与研究」（吉林大学博士学位論文 二〇〇六年）
- ⑦ 劉一曼「論殷墟大司空村出土的刻辞甲骨」（『古文字研究』第二八

- 輯 二〇一〇年)
- ⑧ 莫伯峰「殷墟甲骨卜辞字体分類の整理与研究」(首都師範大学博士學位論文 二〇一一年)
- ⑨ 中国社会科学院考古研究所『安陽大司空—2004年発掘報告』(文物出版社 二〇一四年)
- ⑩ 何毓靈「河南安陽市殷墟大司空村出土刻辞牛骨」(『考古』二〇一八年・第三期)
- ⑪ 中国社会科学院考古研究所安陽工作队「安陽殷墟大司空村東南地2015—2016年発掘報告」(『考古学報』二〇一九年・第四期)
- ⑫ 楊軍会「殷墟子卜辞の整理及文字研究」(広西師範大学出版社 二〇一九年)
- ⑬ 落合淳思「甲骨文通解 河南安陽市殷墟大司空村出土刻辞牛骨」(『漢字学研究』第八号 二〇二〇年)
- ⑭ 彭浩喆「自組卜辞字体分類研究」(華東師範大学碩士學位論文 二〇二〇年)
- ⑮ 趙鵬「截鋸甲骨探微」(『甲骨文与殷商史』新一輯(上海古籍出版社 二〇二一年))
- ⑯ 石川大我「午組卜辞の再整理」(『立命館文学』第六七九号 二〇二二年)

結論

二〇一五年一月月中旬から二〇一六年一月上旬にかけて、中国社会科学院考古研究所安陽工作队によって、大司空村の東南部に位置す

る殷墟 NE0201 (河南省安陽市殷都区・安陽殷墟保護区内・予北紗廠西北部) の発掘がおこなわれた。今回の発掘地域はE区と呼称され、これは二〇〇四年における予北紗廠の考古発掘¹⁾で設定されたA区・B区・C区・D区に続く名称であり、総発掘面積は6493m²となった。E区からは複数の遺構が発見され、仰韶文化・龍山文化のものが少数存在した以外は、大半は殷代のものであった。殷代の遺構の内訳は房址四三、水井二二、瓮棺葬二八、灰坑四〇〇あまり、墓葬一五三、車馬坑一であり、このうち水井のひとつであるJ25(原編号T041H329)は二層に分かれており、それぞれから複数の遺物が出土した。第一層からは刻辞亀甲七片が、第二層からは鬲・罐・盆・簋・甗などの少量の陶片、罐八・陶鬲二・陶豆一・陶甑一、無字卜甲・卜骨・骨匕・骨簪など合計六六点が出土しており、それらの器制などからJ25の時代は殷墟文化第二期の早段であると推定された²⁾。

J25出土遺物の中でも特に注目すべきは、第一層から出土した刻辞亀甲七片である。これらは大司空村から出土した五例目の刻辞甲骨³⁾であるとともに、現在のところ殷墟周辺から出土した最新の刻辞甲骨でもあり、その性質を明らかにすることは、殷墟甲骨文の研究の発展に少なくない貢献をもたらすと考えられる。

そのため本稿では、まずJ25出土の刻辞亀甲七片の基本的な情報や釈文などを確認した上で、関連する先行研究の諸説を整理するとともに、各片の字体分類をおこなうことによって、上述した問題の解決を試みる。

一、大司空村東南地J25卜辞の基礎情報

残片であるJ25:66とJ25:6以外はいずれも腹甲であり、内容は卜辞。腹甲はいずれも人為的に切断して整形されているほか、小さな円孔が開けられており、ヒモを通してまとめておくのに都合がよいものである⁽⁴⁾。

1. J25:5
 - 長：9.5cm
 - 寛：5cm
 - 円孔：直径0.3cm
 - 积文
 - A) 佳丙興⁽⁵⁾弗子。
 - B) 貞、⁽⁵⁾佳辛興⁽⁵⁾弗子。
2. J25:10
 - 長：10.5cm
 - 寛：5cm
 - 円孔：直径0.3cm
 - 积文
 - A) 貞、出。一
 - B) 貞、不其出。一
3. J25:66
 - 長：1cm
4. J25:6
 - 寛：1cm
 - 円孔：なし
 - 积文：⁽⁶⁾々
5. J25:11
 - 長：8.2cm
 - 寛：4.7cm
 - 円孔：直径0.25cm
 - 积文
 - A) 息。⁽⁶⁾
 - B) 尹息。⁽⁶⁾
 - C) 彖⁽⁷⁾。
6. J25:9
 - 長：10.5cm
 - 寛：5cm
 - 円孔：直径0.3cm
 - 积文
 - A) 貞、子⁽⁸⁾帶。
 - B) 帶。

7. J25:7

- 長：6.2cm
- 寛：4.3cm
- 円孔：直径 0.25cm
- 积文
 - A) 貞、犬弗疾。一
 - B) 貞、羽大巴。一⁹⁾

二、分類

J25卜辞の出土に先んじて、劉一曼は『村中南』附録四の考釈の一環として、一九五九年に出土した二片の卜骨と、付近の墓群などの存在から、当時の大司空村には自己の占卜機関を有する宗族の族長が居住していたとした上で、この遺跡からは近い将来、新たな一類の非王卜辞が発見されるだろうと予想を立てていた。¹⁰⁾ そうした経緯もあってか、¹¹⁾ 中国社会科学院考古研究所安陽工作队において劉一曼はJ25卜辞の七片は花東子類卜辞と同様の非王卜辞であり、字体の特徴は花東子類よりやや新しいという認識を示した。岳洪彬・岳占偉はこれを受け、J25の時代が殷墟二期偏早であり、やや花東H3より新しいことが劉一曼の認識と符合するとした上で、『村中南』附録四が出土したH141とJ25の距離が約60mという近さであったことから、大司空村東南地は小屯村・花園莊以外の出土刻辞甲骨の重要地点のひとつであったと結論付けている。¹²⁾ しかしながら、¹³⁾ 趙鵬はやや異なる見解を示しており、J25卜辞のうち残片を除いた五版については、二名あるいは

三名の刻手が刻写したものであるとした上¹⁴⁾、J25:5・J25:9・J25:11は一人の刻手の作品である可能性があると推定し、¹⁵⁾ J25:7とJ25:10は一人の刻手の作品であると断定している。

按ずるに、J25:9に所見する「帯(子帯)」が人名であるならば、その一部の製作時期は花東子類と重複する可能性はあるだろう。ただし、J25卜辞はいずれの文字も「花東字体細小・規整・秀麗、用字較為統一。筆画円転、較少有尖锐折筆」¹⁶⁾と矛盾し、それ以外の要素も花東子類の特徴を有さない。また、前述の通り残片を除くJ25卜辞はいずれも小さな円孔が存在することが共通点となっており、¹⁷⁾ J25:7については他と位置が異なっている。ここから、円孔は刻辞亀甲を切断した後、管理ないしは廃棄の担当者が整理のために開けたものであると考えられる。そのため、円孔の存在をもってJ25卜辞すべてを同一の組類と考える必要性はない。以上を前提とした上で、J25卜辞は¹⁸⁾ 趙鵬と同様に複数の契刻者の存在を想定した上で、字体などの特徴を詳細に整理することで、以下の三類に分割するべきであると考ええる。

[1] J25拙劣類

J25:5とJ25:9の二片。刻跡は拙劣。花東子類の「子」「巳」の字体は両腕上挙「𠄎」である¹⁹⁾が、本類の「子」は両腕直線の「𠄎」である。また、本類の「貞」の字体は尖耳三足「𠄎」「𠄎」であり、これは金文では鼎鼎(集成1189)「𠄎」や鼎方彝(集成3837)「𠄎」などに類例があるが、いずれも耳の形状が異なる。このような三足「貞」は花東子類には皆無であるとともに、殷墟甲骨文全体の中でも極めて希少

な字体であり、管見の限りでは下表にまとめた七片八例のみしか存在しない。さらに、例示した屯附1、合集21703、合集21285、合集22499の「貞」と本類のものはそれぞれ僅かに字体が異なるほか、「子」の字体も「𠄎」または「𠄏」となっている。

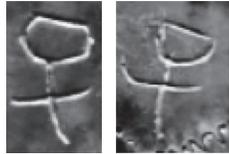
以上から、現時点では本類を新発見の分類と考えるのが最も妥当である。本類が王卜辞か非王卜辞かについては断定の材料が不足しており、不明である。また、J25:11は刻跡が拙劣であるが、J25:5・J25:9と一致する文字が存在しないため、⑮趙鵬の想定通りこのグループに入るかどうかは確定しえない。待考とする。

[2] J25 工整類

J25:7とJ25:10の二片。刻跡は工整。「貞」の字体は「𠄎」であり、花東子類も該当するが、他組類にも常見するものである。本類の兆序字の位置形式はA式^⑮であるが、花東子類は兆序字と兆枝が接近しているC式^⑮である。そのため、本類も拙劣類と同様に、花東子類とは無関係の組類と考えなければならない。本類は字体・兆序字の位置形式は賓組卜辞と類似しているが、貞人署名が存在しない。

[3] J25 待考類

J25:10・J25:11・J25:66の三片。

著録など	分類	材質	貞	子
J25:5	【不明】	亀甲		
J25:9	【不明】	亀甲		
屯附 1	【屯西類】	獸骨		
合集 21703 (掇二 187)	【貞字作三足形的子卜辞】 ⁽¹⁶⁾	亀甲		

合集 21285 (掇二 188)	【貞字作三足形的子卜辞】 ⁽¹⁷⁾	亀甲		
掇三 794	【不明】 ⁽¹⁸⁾	亀甲		
合集 22499 (乙編 8648) (R43672)	【不明】 ⁽¹⁹⁾	獸骨		

結論

本稿の結論は以下の二点である。一点目はJ25卜辞がJ25拙劣類、J25工整類、J25待考類の三つに分類されること。二点目はそれらが非王卜辞であると断定しえないことである。

註

- (1) 詳細については⑨中国社会科学院考古研究所を参照。
 (2) 以上の記述は⑩中国社会科学院考古研究所安陽工作队 (pp.503-505) (p.515) による。
 (3) ⑩中国社会科学院考古研究所安陽工作队 (p.563) は「J25卜辞について「大司空区域以前多次出土刻辞甲骨、這是第四次出土。」とするが、実際には大司空村における刻辞甲骨の出土はこれが五度目であり、合計一四点である。(参照：①馬得志・周永珍・張雲鵬、③中国社会科学院考古研究所、⑨中国社会科学院考古研究所、⑩何毓靈)。
 [1] 一九五三年→1:7 (亀甲・習刻)、1:1 (亀甲・習刻)。
 [2] 一九五九年→SH314③:3 (牛骨・卜辞)、無編號 (獸骨・卜辞)。
 SH314③:3の「貞」は方耳平腹「𠄎」であり、自組・歴組・午類2群の特徴字である。
 [3] 一〇〇四年→T0806H141:2 (牛骨・干支表) = 『村中南』附録四 (04ASH141:2) T0606④:1 (牛骨・卜辞)、『村中南』附録四の字体は出組卜辞に似る。(⑦劉一曼 (p.22))
 [4] 二〇一〇年→H37:2 (牛骨・記事刻辞)。字体は典賓類に属する。(⑩何毓靈 (p.118))
 [5] 今回↓刻辞亀甲七点
 J25卜辞を含め、大司空村出土刻辞甲骨の字体はいずれも武丁期〜祖甲期に存在した複数の組類のものに一致するか、それに近い特徴を有する。ここから、大司空村は単に当時製作された卜甲・卜骨の廃棄場所でしかなかったという可能性も考えられるが、一方で劉一曼のように該地には独自の占卜機関が存在しており、その上で他の組類の文字を模倣した習刻を繰り返していたとも考え得る。これ以外にもいくつかの可能性はあるだろうが、断定の材料を欠く。今後の課題としたい。

- (4) ①中国社会科学院考古研究所安陽工作队 (p. 233)。拓本のみしか知られていない資料であるため断定は難しいものの、こういった円孔は他の甲骨にも存在していた可能性があり、一例としては存補²¹⁵と²¹⁶【自午間類（自肥群）】などがある。存補²¹⁵と²¹⁶の分類については、²¹⁷石川大我を参照。
- (5) 整理者は「彖」を「姪」もしくは「妍」と読む。
- (6) ⑮趙鵬は存在しない横画を補って「弗」とする。暫定的に原積文に従う。
- (7) 原積文は「彖」を「彖」とするが、写真からは「又（彖）」が確認できる。そのためか、⑮趙鵬はこれを「彖」とする。これに従う。
- (8) 「帯」は「花東」²¹⁸では「帶」と隸定されているが、原積文・⑮趙鵬に従った。また、⑮趙鵬は「帶」を「行為」とするが、根拠を欠く。
- (9) 「羽」字は倒刻。④蔡哲茂は「擘」と読み、疾癒を意味すると考える。これに従う。
- (10) 『村中南』(p. 749)。また、大司空村近辺の遺跡については他の研究者も概ね近い見解を示しており、一例として⑨中国社会科学院考古研究所 (p. 208) は「大司空東南地（即現在の予北紗廠）是殷墟時期非常重要的一个族邑、这里不僅有大量的殷代墓葬、而且環有許多商人的生活遺存（後略）」とする。
- (11) ①中国社会科学院考古研究所安陽工作队 (p. 233)。なお、この論文の責任者は岳洪彬・岳占偉だが、発掘および出土遺物の整理作業には複数のスタッフが関与しており、劉一曼は積文の作成を担当している。
- (12) ⑫楊軍会 (p. 48)。
- (13) 常見の字体。典型例は花東23など。
- (14) 兆序字が契刻される位置の形式は⑥蔣玉斌 (pp. 162-166) によると以下の三つが存在し、分類の基準の一つとして利用することが可能である。
- A式：兆幹の横側に兆序字を刻む形式。位置は兆枝の方向と同一。自組の大部分・賓組・出組・何組・自歴間類・歴二類の大部分・歴草類・無名組・婦女類・子組が該当。
 - B式：兆序字を卜兆の真上に刻む形式。歴一類の大部分・午類・円体類・劣体類・黄組が該当。
 - C式：A式に近いが、兆枝と兆序字の位置が近接している形式。花東子類が該当。
- (15) 典型例は花東37。
- (16) 「貞字作三足形の子卜辞」の命名と分類は⑥蔣玉斌 (pp. 146-148) によるものであり、鑽鑿の形態から武丁期のものであるとされる。また、⑧莫伯峰は本片を「子組一類」とするが、ふつう子組卜辞の「貞」は尖耳有足「巫」である。兆序字の位置形式も異なる。これには従わない。

- (17) ⑧莫伯峰：「？」。⑤楊郁彦は「自小類」とするが、自組小字類の特徴字は確認できない。これには従わない。
- (18) ⑥蔣玉斌は接二²¹⁹と接二²²⁰の特徴を整理した上で、「其与該当類の關係待考」(p. 186)とする。
- (19) ⑧莫伯峰：「？」。⑤楊郁彦は「自肥類」とする。注三で述べたとおり、方耳「貞」は自組の特徴字の一つではあるが、歴組・午類など他組類にも存在する。また、この字体の方耳三足「貞」は殷墟甲骨文ではこの一例のみであり、自組肥筆類であるかどうかも確定しえない。暫定的に⑧莫伯峰に従う。

(立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所客員研究員)

